

「秋田に育まれた

我が東洋経済新報社」

東洋経済新報社 代表取締役社長 駒橋憲一（昭和50卒）

弊社は昨年、創業125周年を迎えました。実は125年前に創業したのが、秋田中学出身の町田忠治です。当時はまだ「太平洋学校変則中学科」という名前でした。卒業後、県の留學生に選ばれて東京大学予備門に入学します。東大予備門は後の第一高等学校、いわゆる一高です。しかし、途中で脚氣を患って秋田に戻ります。

ちょうどそのころ、犬養毅が秋田にいました。犬養は自由民権運動家から政治家になり、首相だった515事件のときに殺されますが、当時は官憲の追求を逃れて秋田にきていました。犬養は当時の「秋田日報」、今の秋田魁新報ですね、ここで言論を展開していました。

また地元の青年向けの塾を開いていまして、町田はそこで世話係をつとめていました。この犬養との縁が、のちのち町田の人脈の広がりにつながっています。

町田は病氣も癒えて東京大学法学部撰科に進み、1887（明治20）年に修了します。その後、犬養の伝手で「朝野新聞」や「郵便報知新聞」（今の報

知新聞の前身の前身）で政論記者として活躍します。町田は外遊を希望し、1893（明治26）年に横浜を出国、アメリカ、ヨーロッパに渡ります。特にロンドンに長く滞在しまして、その時注目したのが「エコノミスト」や「スタチスト」という経済雑誌です。これがイギリスの経済界に大きな影響力があることを知り、日本でも同じような経済誌が必要だと思に至ります。

1年ほどの外遊から「報知新聞」に戻ったものの、経営悪化で政治経済分野から遠ざかり、世俗的な新聞になったため、町田は退社します。そして、いよいよ本格的な経済誌の創刊に向けて活動を始めます。しかし、先輩や友人に相談すると、ほとんど反対されました。経済誌なんて、そんな売れる物じゃない、ということでした。洪澤栄一にも相談したら、当初反対したようですが、町田の熱心さにはだされたのか、最終的には数百部は買い上げて、知り合いに配布してくれる約束をもらいました。そのほか、三菱財閥や銀行からも広告を出してもらった形で支援を得ています。ただ、元手となる金銭の支援

者は誰なのか、町田は最後まで明言しませんでした。銀行の川田総裁だと言われています。

そういうことで、1895（明治28）年の11月、日清戦争が終わった年に、「東洋経済新報」が創刊されました。町田はまだ32歳という若さです。ここまでこぎ着けたのも、町田の強い信念、計画性の表れだと思えます。同時に、洪澤栄一や日銀総裁といった有力な経済人と、かなりの人脈を築いていたという点にも驚かされます。



講演する駒橋憲一さん

しかし、町田は1年ほどで会社を離れ、日本銀行に入ります。さらに大阪の山口銀行（後の三和銀行）を経営し、1912（明治45）年には秋田選挙区から衆議院議員に当選。その後、農林大臣や商工大臣を務めました。そして昭和10年に民政党総裁となり、時代が時代なら初の秋田出身の首相になっていたことでしょう。

次に石橋湛山の登場です。湛山が東洋経済に入社したのが明治44年、27歳の時です。そして40歳で主幹兼専務、つまり会社のトップになっています。このころには株式会社になっていましたが、今みたいに経営と編集とが分離しておらず、言論のトップが経営の責任をもつ、ということで「社長」ではなく、町田以来ずっと「主幹」と称していました。

昭和期に入ると経済状況はますます厳しくなり、軍国主義が高まります。戦局はどんどん悪化し、東京も空襲に襲われるようになります。いよいよ東京は危ないとなった昭和20年3月、石橋湛山は秋田の横手に疎開することを決定します。当時は平鹿郡横手町です。横手でお世話になったのが、出羽日報社です。出羽日報社は1894年に「横手商業新聞」を創刊しており、その後「羽後日報」となり、県内で秋田魁新報に次ぐポジションにあったようです。社長の石川豊治さんは、昭和19年末に東京にいられた際、弊社を訪ねら